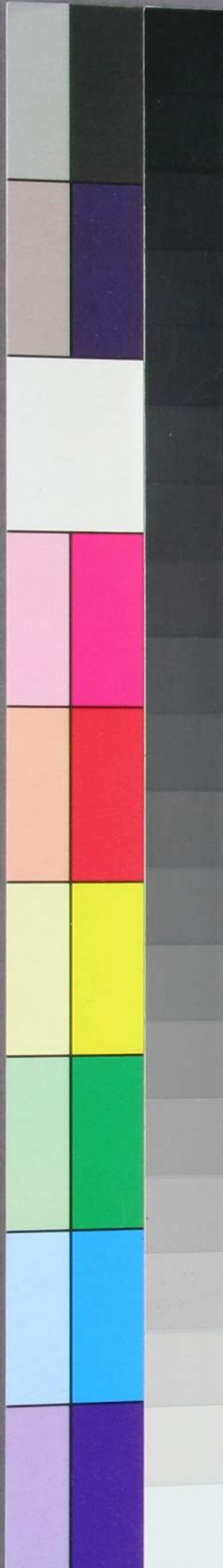


三日月於專

乃松心齋
三冊
光文堂

1291
1



門へ 13
號 1291
卷 一

明治三十九年一月二十九日
水谷弓彦氏寄贈

空山房

去^こ年^{ねん}上^{かみ}末^{すえ}しと名^な知^ち惜^{おし}薄^{うす}疾^{はや}今^{いま}年^{ねん}戲^げ作^{さく}

志^しの^の名^なを^を流^{りゅう}行^{ぎょう}と^とや^や四^よ方^{ほう}先^{せん}生^{せい}が^が狂^{きやう}詩^し

存^{ぞん}心^{しん}と^と時^{とき}ま^まし^しも^も今^{いま}兔^う兎^う編^{へん}文^{ぶん}漢^{かん}の^の詩^し廣^{くわう}

中^{ちゆう}段^{だん}を^を世^よよ^よ時^{とき}め^めく^く奉^{ほう}早^{そう}七^{しち}年^{ねん}

求^{もと}む^むる^る夜^よの^の仙^{せん}女^{ぢゆう}番^{ばん}と^とす^すも^もよ^よ身^みく^く富^{とみ}は^はれ^れれ^れ

難^{なん}へ^へり^り其^{その}趣^{すい}向^{かう}乃^の人^{ひと}氣^きを^をと^と終^{はつ}る^る

難^{なん}へ^へり^り其^{その}趣^{すい}向^{かう}乃^の人^{ひと}氣^きを^をと^と終^{はつ}る^る



ノウリ

料理乃めく美味とぬむるさかてう 船橋屋は菓子
こびとくは我儘くやと賞とせしあかんかみむる
連乃せしまるるやとたへしとて言のふ
まは焼肴猪口のいろくくあかと救限あかと出時乃
流行前とくはと要ととれは麻疹と見の
名く医者い者やとれは按十あし百ひゃくか受座乃う支智し匠
宅たくと東あもやめしあ批ひ賣う共あと海あかあ一世い世せは七しち覺
鄙ひくく生うまま茶屋ちや屋や居いるる都みやこ言葉ことばもくま空あけけ
あはるしは戸乃根ね生うまま戯げ作者しやうも大おほ阪さか下したりの
近ちか松まつと名な集ありあたた報はつ持ぢがが株かぶ取とりり抱かくく屋やを
持もとと人ひとかか三さん足あし線せん道みち取とりりのの類るいひひ若わかくく見みれれは
燈とう心しんぬぬ工くのの提てい燈とうとと釣つり燈とうああくく皆みな是これ天てん地ちの
造ぞう持ぢああくく更さらくく人ひと工く若わかくくががくくつつくく悠ま悠まと
高たか慢まんとと禪ぜん史しのの名な詮せん自じ性じやうととんんるるぬぬままは
俗ぞくくく見み安あまま合あ巻まはは戲あ場ばづづりりをを書かきき綴つづん
をを何なにまま當あ浦うらととひひ死しししづづくくひひ其その赤あか乃のも

濃りがらしく日敷ありけし五月雨意の割敷の
水勢あら増らぬ道ひし通ひし川流は乃
末を深川や濱に真砂の時は傾思ひ若く
涙乃腫と世惜まれ郁優と相撲ひとく
西へ引込を西か泊東駱宛の許判夷渡る
西園へ入と黄金乃山成あとも倚る太宗を
あまんとて以代を待く神皇舞らるく廻る
月日れ行道志此西未布乃時代好みも

局女郎が上着とあまびね言終る乃物敷寄ふ
村の兄が單物と容れ大まを捕へ海部
鞆は花車か男のこころあり道まが通れは遠し
紫が顔模様もゆき春か親父乃手紙をたのむ
斯れはしれを能ひしめ弄ゆれこまけし
毎ひもたわら大まの難髪と強し寵を
得歎成の眉利と増らぬと思せしれ然る
高橋の住居とてく南浦は月と其

各々照し猿ら山岳に留めつて北里の
あり北里の藝と自らよき善孝が花
咲梅川を流まよ清せの湯又が所始を
瀬川の水と字はありまもつた是もつたとる
るが中も何某の者の加持ある駒木乃取
結北は神あり流れくかへる思浮世ある
色氣をう巻ひ柔の敏昌の隠ひ七十二
の糸漬と巻きめ大金わりの出由世家を

歩が蒲満ともてく巻く汁と隠し電氣漢も
津のまある平へつて昔人情の外と出く人
情を巻くぬと流るる春の思ひあはれを
日月の舞のつけよめ熱持茶目形坂本氏に栄
ひやうの弁格子梅華の葉と昔の中のお
度と矢ら相荷の遥ろの葉の猿ら近
歩と顔のよがふる女下ハ江箭市隠

文亭綾紙





道具屋
守兵衛
夫婦投身の
女とすゝ木夏
事本本文
乙巳



きんぎょの
おぼろの
今月乃月
一筆
並小格
ふさふさ秋
深松

道具屋重藏

三日月

五

仙女香乃懸空緬向一橋小室

作里たへせし二月月夜

文亭

此草席と書たも

見とましくありし

去就三月月

下總金江津

三日月菴

宗且

春禮
英談

三日月阿專卷之一

雅名

本朝好述傳

江

南僊笑楚滿人稿本

發端

關々く 睚鳩ハ河の洲あり。容宛る 叔女ハ君
子の好述と毛詩より見くる古詩のいハ彼ハ睚鳩の
人臨絶る荒原。雌雄むらまゝ 群擁ふさるる
君子の夫婦礼義あつて賦しる詩あり。

大元 睢 旆 といくろ 禽 かのく 人 人を 驚 ぞくろ 人 人
 濱 しのすめ じ ば ありて 人の 為 捕 捕らる ぎ 志 志す
 うく 安然 として 易 易く 天 羊 羊と 全 全する 人 人間の 上
 は 誓 こと 世 塵 塵と さ け けく 山 額 額 山 山 引 引 隠 隠 千 千 異
 う ず 爰 爰よ こと 六 引 引 入 入て 身 荆 棘 棘の 林 林は ありて
 の ころ も 節 義 義と う ころ ず 佳 人 人 子 子よ ありて 終 終
 負 探 探と 全 全する 一 放 放の 物 結 結 あり。 ところ 由 来 来 といふ
 ところ 鎌 倉 倉 殿 殿 宗 宗 采 采の 頃 頃 ころ 扇 扇 谷 谷よ 末 末 廣 廣 聖 聖

亮 春 風 風と 吹 吹へ 赤 赤 冠 冠 ころ 文 武 武の 道 道よ くら
 ら ず 又 傍 傍 茶 茶 夏 夏と 嗜 嗜み 泉 泉 石 石と 好 好む の 癖 癖
 有 有 け け 庭 庭 前 前よ 右 右 び びて 幾 幾 手 手と や 経 経 ぬ ぬら
 ん と ち ちが 燈 燈 籠 籠 あり。 志 志 こと も の ころ 夏 夏よ や
 びる 燈 燈 籠 籠 並 並 石 石と 火 火 袋 袋の み ありて 挿 挿 する 遠 遠
 近 近の 石 石 工 工と め めして。 これ が 挿 挿 石 石よ ろ づ ぎ ぎ 石 石と せん
 さく せん せん せん 似 似ても 似 似つ ぬ 無 無 下 下よ 新 新 一 一 石 石
 の ころ ありて 葉 葉 石 石の ころ け け ぎ ぎ 年 年 頃 頃

是と云ふ快の直は思ひて。いと他國へ人をうつらして
廣くこれとせりあるひける。斯て或時春風々々城
外へ放鷹よ出のひしが。とある原中よ探して見ると
石のうつも苦むして。らの燈籠の掉石よあたらん
みよと思ふよううらる石あつとけまが村のわらよ懐び
るひかく我があまの迎りよ叔石あつとせりあは
ざうとこそと石工どもの全く等閑よせしうらる
ひらと早速家人よ言付て彼石と庭へ引らせ

掉石よせせむるあは。あつらも始り。是よ作つと
石のぞく。その古びこのひ昔のこまのりよ守る。あつ
たまの道具とてあつけまが。よろこびのぶみかざり
る。其夜の彼の石燈籠よ火をと下。大きき酒
飲み催し。も様焼らるらん。家中の面々も酒
を賜り子とる。頃也庭所よ入つとあひぬ。斯て
其夜も深くと更行まよ。木竹も庭も
る。又満ごる春風々々風と目覚てりぬるあは。



三日月

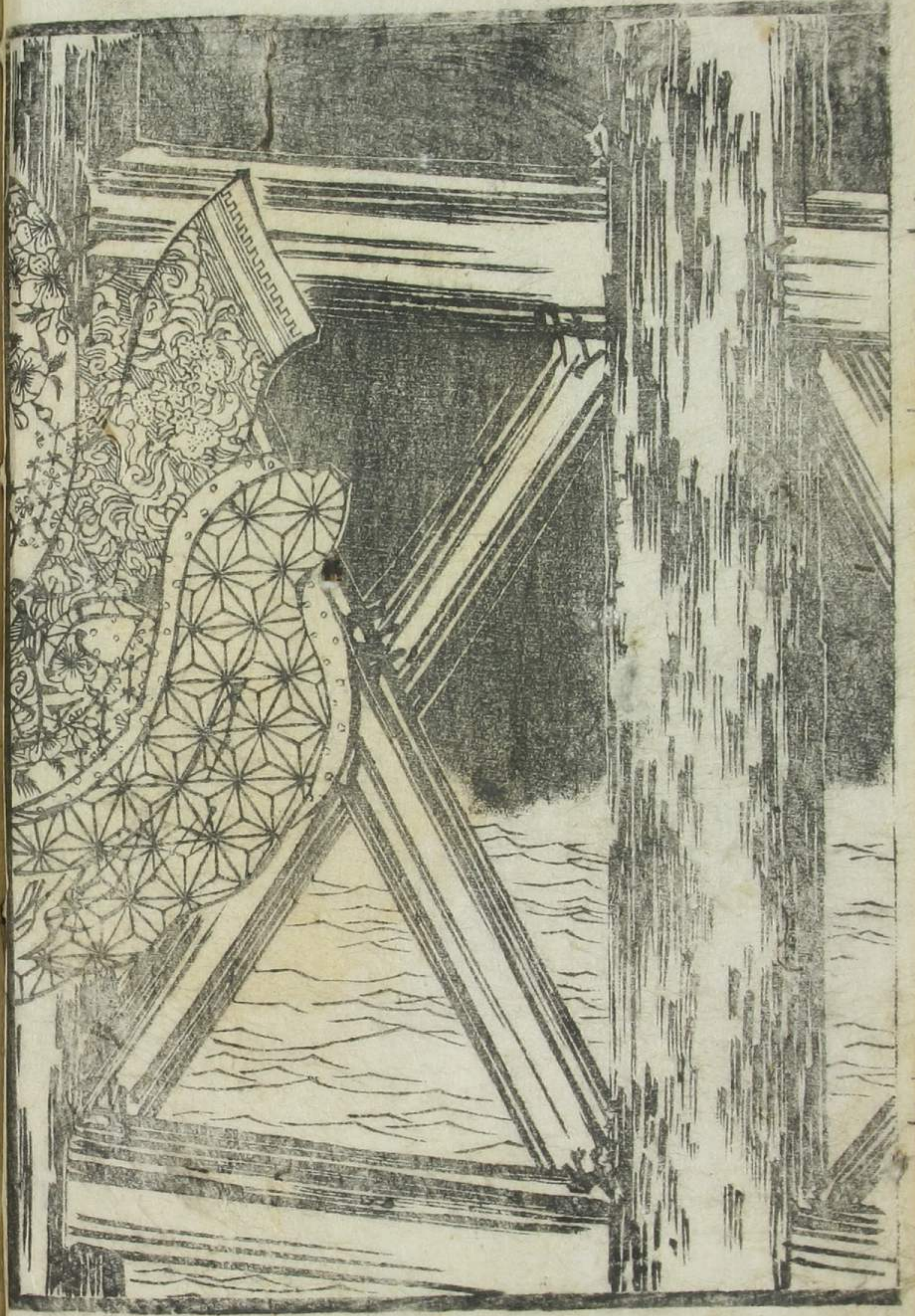
たを定め、一々養ふでもがむと親のつらさを
徒よせまの言状のまの不便向うと思はせらる
まらしく左振る言状のまの不便子細あつて
其名ハヤシキマナササなど。しんが父と人ハ後
倉の去る武家方母と人ハ継ぐ。中切の時ハ
随分しくはあつて下さるまの言状も言はせ
近頃の父の留守の無理なりのやまうてそれハ
く片時へも傍よらまらずに居るの言状

かたのちりまの言状も又とやうな言状も
まして内外の下女も言状もあつて
とびつら私言を何やと有る言状と
昔言のその言はく言はつて言はる言状
る言はく言はる言はく言はる言はる言状
笑あてくらしく言はる言はる言はる言状
まの言はる言はる言はる言はる言状
言はる言はる言はる言はる言状
言はる言はる言はる言はる言状
言はる言はる言はる言はる言状

うち。何ぞは本家け。山間柄とらふらふ方の所へ
 お供やまを考へるが。とまじらひがらひのます。
 ずとます。肝心の日本家の殿さまとやが。只今の私
 の母と何やら訣とからでござります。とからそれら
 てうつく。私のや復へらうとす。とらのまを。うつくを
 とまじらひのむねハテとまう。物で下思業の体よ。傳へら
 む。亀が。モシとんら何ぞ町家のうちよ。とまじらひの
 町人ら。とらふら。むね當へ。とまじらひのまを。

當とやハまづ平塚の横綱とから。私の児時の乳
 母が。ちのま。とまじらひのま。が終へ。まのま。と
 夏も。とまじらひのま。せぬ。誰か人の話で。ま。ま。其乳
 母の。ま。ま。を。物師とから。とまじらひのま。ま。と
 とんら。とまじらひの。ま。へ。名。ら。と。とまじらひのま。
 そよ。の。商。賣。ら。と。とまじらひの。ま。へ。と。とまじらひのま。
 親。物。場。の。木。戸。を。と。とまじらひの。ま。へ。と。とまじらひのま。
 とん。ら。者。ら。と。とまじらひの。ま。へ。と。とまじらひのま。

三



三日月

松平が貧乏人の夏衣を身と脱ぎ捨て。お屋敷へは
 いのちをぬらうと去来内（お屋敷）の老翁もろくろのまき
 ところろくろ（お屋敷）松平（お屋敷）獨り者すまぎ洗濯（お屋敷）ははりの撫（お屋敷）
 花やみずや針（お屋敷）その日かむがのひまう（お屋敷）つねぐ
 びやぐ（お屋敷）のまう（お屋敷）とひ（お屋敷）音信（お屋敷）もい（お屋敷）ま（お屋敷）廿（お屋敷）の
 ちのまう（お屋敷）が。夜深（お屋敷）といひひ（お屋敷）衣類（お屋敷）を（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）と
 てちと（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）松平（お屋敷）こ（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）
 ナー（お屋敷）娘（お屋敷）の（お屋敷）涙（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）
 ナー（お屋敷）

ぶらぶらと用度かごで
 まして高麗寺の知事（お屋敷）のつま（お屋敷）か入（お屋敷）の花
 橋の下と身（お屋敷）で通（お屋敷）つま（お屋敷）か入（お屋敷）のつま（お屋敷）か入（お屋敷）
 どのふか（お屋敷）か入（お屋敷）つま（お屋敷）か入（お屋敷）つま（お屋敷）か入（お屋敷）
 そとふか（お屋敷）か入（お屋敷）つま（お屋敷）か入（お屋敷）つま（お屋敷）か入（お屋敷）
 の助け（お屋敷）で進（お屋敷）む（お屋敷）思（お屋敷）ひ（お屋敷）通（お屋敷）む（お屋敷）
 娘（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）
 娘（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）
 娘（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）
 娘（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）の（お屋敷）ま（お屋敷）

色く^{あま}とち^{あま}屋^{あま}まで^{あま}受^{あま}て^{あま}ま^{あま}あ^{あま}り^{あま}や^{あま}ら^{あま}ず^{あま}。そ^{あま}ま^{あま}ら^{あま}に^{あま}居^{あま}く
 身^{あま}の上^{あま}の^{あま}増^{あま}や^{あま}う^{あま}け^{あま}る^{あま}こ^{あま}の^{あま}ま^{あま}て^{あま}思^{あま}ひ^{あま}が^{あま}物^{あま}を
 っ^{あま}た^{あま}の^{あま}よ^{あま}す^{あま}い^{あま}ま^{あま}い^{あま}。そ^{あま}こ^{あま}で^{あま}町^{あま}家^{あま}よ^{あま}あ^{あま}む^{あま}安^{あま}い^{あま}が
 び^{あま}の^{あま}ま^{あま}う^{あま}を^{あま}受^{あま}ま^{あま}い^{あま}ら^{あま}横^{あま}細^{あま}よ^{あま}う^{あま}の^{あま}者^{あま}が^{あま}あ^{あま}る
 せ^{あま}あ^{あま}り^{あま}か^{あま}ら^{あま}。そ^{あま}ま^{あま}に^{あま}幸^{あま}と^{あま}お^{あま}供^{あま}を^{あま}や^{あま}ま^{あま}い^{あま}。さ^{あま}ら^{あま}に
 お^{あま}ま^{あま}入^{あま}お^{あま}世^{あま}活^{あま}と^{あま}う^{あま}ま^{あま}う^{あま}て^{あま}あ^{あま}び^{あま}て^{あま}下^{あま}さ^{あま}り^{あま}の^{あま}ま^{あま}あ^{あま}ら^{あま}ト。始^{あま}
 終^{あま}を^{あま}受^{あま}て^{あま}乳^{あま}母^{あま}ハ^{あま}よ^{あま}う^{あま}こ^{あま}び^{あま}。そ^{あま}ま^{あま}に^{あま}や^{あま}ま^{あま}の^{あま}か^{あま}
 う^{あま}ぞ^{あま}と^{あま}い^{あま}ト^{あま}の^{あま}ま^{あま}あ^{あま}ら^{あま}。よ^{あま}う^{あま}ま^{あま}凡^{あま}々^{あま}筋^{あま}の^{あま}難^{あま}し^{あま}び^{あま}に
 ま^{あま}う^{あま}。お^{あま}娘^{あま}さ^{あま}の^{あま}の^{あま}お^{あま}兼^{あま}さ^{あま}る^{あま}。お^{あま}深^{あま}い^{あま}お^{あま}夢^{あま}よ^{あま}う^{あま}の^{あま}ま^{あま}
 じ^{あま}私^{あま}お^{あま}い^{あま}づ^{あま}ら^{あま}ら^{あま}お^{あま}世^{あま}話^{あま}や^{あま}え^{あま}い^{あま}づ^{あま}ら^{あま}と^{あま}い^{あま}ら^{あま}
 け^{あま}ま^{あま}う^{あま}。只^{あま}今^{あま}お^{あま}を^{あま}う^{あま}ら^{あま}や^{あま}ま^{あま}う^{あま}通^{あま}り^{あま}私^{あま}も^{あま}連^{あま}合^{あま}ま^{あま}ら^{あま}
 く^{あま}ら^{あま}い^{あま}ま^{あま}い^{あま}と^{あま}寡^{あま}づ^{あま}ら^{あま}い^{あま}の^{あま}不^{あま}自^{あま}由^{あま}づ^{あま}ら^{あま}び^{あま}に^{あま}い^{あま}ら^{あま}
 け^{あま}ま^{あま}う^{あま}。あ^{あま}ら^{あま}二^{あま}人^{あま}ぐ^{あま}ら^{あま}い^{あま}十日^{あま}や^{あま}廿^{あま}日^{あま}ハ^{あま}い^{あま}ら^{あま}い^{あま}の^{あま}あ^{あま}ら^{あま}い^{あま}の^{あま}夜^{あま}中^{あま}
 一^{あま}の^{あま}ま^{あま}う^{あま}赤^{あま}ら^{あま}他^{あま}人^{あま}の^{あま}お^{あま}も^{あま}い^{あま}ま^{あま}い^{あま}の^{あま}よ^{あま}う^{あま}は^{あま}夜^{あま}中^{あま}
 け^{あま}ま^{あま}娘^{あま}が^{あま}い^{あま}ら^{あま}い^{あま}と^{あま}私^{あま}が^{あま}う^{あま}ち^{あま}と^{あま}お^{あま}尋^{あま}ね^{あま}ら^{あま}う^{あま}ら^{あま}い^{あま}ら^{あま}。お^{あま}娘^{あま}
 ち^{あま}ぬ^{あま}と^{あま}お^{あま}連^{あま}合^{あま}し^{あま}て^{あま}し^{あま}ら^{あま}い^{あま}づ^{あま}ら^{あま}い^{あま}もの^{あま}。そ^{あま}の^{あま}お^{あま}理^{あま}と^{あま}ま^{あま}

いと遅くも夜は遅くも……
とて可憐な心……
たす……
ゆ……
府……
……
ま……
あ……

龜のよ帰らぬ……
後……
……
……
……
……
……



三日月
一



三日月
一

簾やふかいく何のここへ入りまろとと寒いいと火管と
 ののと抱て簾まろからちつも寒いいまるいて
 まろぬ。サカく早いおは体ころまじりませ下ままはてくひよ
 むづつのゆいの中で舞舞るまかて彼の娘ハならし
 ずも横廻るる乳母が方よ食客とるの一日二日とら
 まろち真夏まようだのの重るる時やまのぬらん乳母ら
 の風と風のゆ地とおめせが日よ地一病い重り頼み
 ずくまく入けまが娘ハならし一身方うく昼夜看病

急こうく神よのりはよたのころくと女抱城と
 尽せぐも露たむるもある一まく今ハ命且女よせる
 けまがの老母が店橋のものは舞はせんうころくりの
 娘らのみ渠の方へ引えるこ横廻の店とがは舞舞物屋へ
 責ます一何方へ行くや知るものの更ようのけと。

美び春春宵宵
 三三日日月月河河尊尊卷卷之之一一終終

春宵三日月阿專卷之二 雅名本朝好速傳

江戸 南仙笑楚満人稿本

算貳回

浮川竹丸うきがわ たけまる 泣きなみ といと多おほく かけがらおのころうら ころふくら け頃鎌倉佐々ささ 女め
谷や 佐さ 女め 橋はし の 辺へ ころるころる 局まご 店みせ ころりころり するする 遊あそ 女め 屋や の 光景あかり
といい 六む 目め の 高貴たかき といとい 六む 掛か に 貞まこと あるある 夏なつ まで
有あ りるりる といとい 奈何なにか といとい 先ま 此こ 廓がら の 入い 口ぐち といとい 廣ひろ く
内うち へ 入い りり といとい 街まち 幾いく 筋すぢ とと するする といとい 軒のり くく といとい

三日月

火の要慎 路次六切とある一々行燈とつけ 黒骨の
腰障子こそなる 袂き所よ夜の物ある 積臺うらひ茶
殿とぞより入らぬまで 粧ふける女の 志ろみ火淋よあま
ほく ちや喃とよふハ客人を待ぬやあつひ未十二と
覚き切卷の戸ロよまで見すあらの人の袖を引ら
めて 中らと争のどころへ 逃んとするさる 彼頼光の
家臣 渡辺の細とからんが 羅生門の ちもうげふ 彷彿なり。
新内 門分とさるげくの 法印の 務平口入はまじりの 妻の

武佐ハ高砂と謡ひつゝ 女の顔 ありと 且て 見えの 犬の
糞ぬするを 覚へず かの 腹中へ しまし 夜と昼する 別
世界あけて ちやと しまし 朝ハ さまが 寂莫なる 何
も 同様 後好の 情は 變つて へうつらと たる
巴の 列を ちやと ちやと 上 八丈の 肩入 ちやと ちやと 著る 三十五六の 観
造 世三三の ちやと ちやと 世と ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと
ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと
湯入の ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと
ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと
ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと ちやと

世三三
二

うき入トおぼし「マお清さんよ辰さん。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

とらへくとおぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。

おぼしおぼし「お清さん今辰ぐお客をかへて。



のみ人も喰やうと云ふの苦しうで有る病氣が十先
 一の病氣でよん野あぐやうむすめらるみこのしん
 引あつてはが肉あさんかあぐやうのく間まうく其
 人まつの先んであまうくとあひうせ。サそとで肉
 災さんぐあいの病氣ぐ物入が多うこう人よ何や
 わで城ふようちまもさるもらうね入よようて子も
 かのて居て野がどよもれ兼て。とうりの店よ出く
 店るお務さんよ結婚の夏とたまうして私どもあま入

野のやうな女郎よして店へねてあんなま其旦那
 きの苦しのう中よれであるが其うららと後い
 のたまう。お務さんよまじりて候とて可愛
 そまうとくあつてけせど脊よ獲とからごうらは
 が従入のりて旦那さんよアノ子に言中すと
 断して野が文藏さんかあいの氣性ごうら以の外後を
 立てとんご夏ごアノ子に込あつてからがね入あぐうと
 領うものどもお宿とらふか去るお勝くのを屋あううく

のく代が代ら。おいら達の内のよめる高賣体の
 呼へ。ち出る。さる。夏もあひ入。響くも。が。さ。ゆ。ん。ひ
 きわびと。ど。わ。と。あ。さ。い。よ。そ。え。る。夏。と。ま。は。い。の。い
 きる物りと。けんも。ひろく。ま。換。投。ご。う。ご。う。と。り。つ。て。何。そ
 お務さんがよく商をす。う。ら。ひ。つ。て。呼。が。店。を。仮。て。居。る
 夏。の。日。バ。泊。つ。つ。ら。が。切。た。う。り。と。り。ゆ。め。の。ご。う。ら。今日
 くふさ。う。つ。つ。る。を。アノ子が。見。る。に。見。る。て。先。頭。文。藏
 せんが。頼。つ。て。寤。て。居。る。さ。う。も。ち。お。務。さん。と。お。ど。ん。を

まで。且。お。さん。よ。か。く。て。店。へ。出。る。す。う。の。西。が。こ。の。も。も
 み。や。の。お。も。め。し。ま。う。す。ひ。な。に。こ。の。ご。う。の。い。ろ。の。馬
 面。た。う。う。の。の。ろ。ろ。へ。あ。ん。ま。入。柄。の。ゆ。ひ。美。しの。怖。く。す。る
 よ。ま。の。子。が。あ。い。ゆ。い。ゆ。う。ら。サ。サ。評。判。よ。う。う。て。匹。回。の
 と。あ。る。夏。は。く。あ。ん。よ。あ。の。子。の。ひ。ま。も。居。こ。の。い。ろ。の。夏。は
 つ。の。う。ね。戸。が。明。く。と。あ。か。と。ま。ま。る。夜。も。ち。ち。り。と
 夏。の。店。へ。知。る。と。あ。い。よ。あ。か。が。あ。が。る。う。ら。と。ま。さ。いで。み。ん。の
 ま。あ。の。子。の。夏。と。三。日。月。く。と。り。の。母。さん。ハ。ん。ん。と。し。ら。も。ら。

モウ昼でして見えて。お天道さるが真赤まうらうらう。
 復の時計が九ツ時ぐえのけしこ。さして飯よあま
 しくかえなる。臺屋の男が。さしあつぬ。臺のあつ
 ちとて。改のうへのせとあつらうとけつ。まぶしやい
 こことあつらう。何のは頃。あつらう。あつらう
 せうと。さしあつぬ。さげと。あつらう。あつらう
 さしあつぬ。さしあつぬ。さしあつぬ。さしあつぬ。

若くして。さしあつぬ。さしあつぬ。さしあつぬ。さしあつぬ。

〇亭子時頃も。

客人の袖引。

町入

さん侍さん。こし息子さんよろでのまふと海をた。
 貴賤群集のそのころに。其かゝる人か不火のたは余
 あこのの國侍。海濱の迎うよまき寄可て。國侍「んやぐ」
 門番くト大勢のよびきつたは海濱に居「ライ吉やさん
今手に入らぬはよら平「番にさる奴がまやまぐらつ。ものらつちの夏と門
 番ごころ。何このよ。路次むんぶら門番
 めんまど夏と「ライと」夏と「ライとんら。エフ
 門番でござりやうが。なむかゝら何の山に

つと申す子 國侍「ま貴公方の左様なら。はる夏あのもの
 く門番でござらう。次郎「エイマ門番のよふもの
 のでござらやん 國侍「まマ門番のよふもの
 作波けらるま外の役より兼帯志て相勤らる
 のでござらる。次郎「エイとんま志むがうの奴でござ
 りやせん 國侍「拙者夏ハ遠国の産でござらる當
 ハ初めでのまで一向不案内おやが。夏ハ何とや所
 志やて 次郎「エイらう入夏戸鐵炮店でござらるや



國^{こく}ハ^ハテ^テ鉄^{てつ}炮^{ぱう}店^{てん}ハ^ハテ^テ異^いハ^ハラ^ラズ^ズト^ト美^みシ^シク^クヨ^ヨク^クノ^ノ物^{もの}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。
左^さ様^{さま}と^とシ^シテ^テハ^ハ美^みシ^シク^クシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
時^{とき}武^ぶ克^く盛^{せい}人^{にん}ノ^ノ事^{こと}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
夏^{なつ}と^とシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
路^じガ^ガ鉄^{てつ}炮^{ぱう}店^{てん}ノ^ノ積^つ古^こト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
志^し志^し古^こ今^いノ^ノ事^{こと}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
音^ねハ^ハ~~~~^{~~~~}こ^この^の大^{たい}笑^{しょう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
鉄^{てつ}炮^{ぱう}店^{てん}ノ^ノ積^つ古^こト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]

都^{みやこ}シ^シテ^テ玉^{たま}ハ^ハ何^{なに}カ^か王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
ぜ^ぜり^りゆ^ゆす 國^{くに}ハ^ハア^ア何^{なに}カ^か百^{ひゃく}目^{もく}王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
と^とま^まは^は皆^{みな}上^{かみ}達^{たち}ノ^ノ人^{ひと}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
警^{けい}古^こト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
お^おめ^め〜[〜]ハ^ハ何^{なに}カ^か王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
お^おめ^め〜[〜]ハ^ハ何^{なに}カ^か百^{ひゃく}目^{もく}王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
お^おめ^め〜[〜]ハ^ハ何^{なに}カ^か王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
お^おめ^め〜[〜]ハ^ハ何^{なに}カ^か百^{ひゃく}目^{もく}王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
お^おめ^め〜[〜]ハ^ハ何^{なに}カ^か王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]
お^おめ^め〜[〜]ハ^ハ何^{なに}カ^か百^{ひゃく}目^{もく}王^{おう}ト^トシ^シテ^テ置^おケ^けル^る。○[○]

...

...

せうに牛をうづ何よも知つゝ夏も何となくのません。
 むす清けまが言へばのよよも賤の勤とあつて。
 誰に取進は遠あする夏もこの道てはよ花のそで
 たぬ里まうへをづらとと男のさへけしとやら。
 くれよかきとあき夏かこたは修在行よ夏はさ
 とも。お前をてづらへは存はる。さう。内は源流をて
 も常はあも入たへの夏は可憐とやぐり。あふ
 せいもあひやくのさのぼる者のあふさげん。

せうに牛をうづ何よも知つゝ夏も何となくのません。
 むす清けまが言へばのよよも賤の勤とあつて。
 誰に取進は遠あする夏もこの道てはよ花のそで
 たぬ里まうへをづらとと男のさへけしとやら。
 くれよかきとあき夏かこたは修在行よ夏はさ
 とも。お前をてづらへは存はる。さう。内は源流をて
 も常はあも入たへの夏は可憐とやぐり。あふ
 せいもあひやくのさのぼる者のあふさげん。

ませうが私がとりのみかよりしむきつうあ前方の
 心で私が何ぞいづらと志してはるるまよりの
 年をむかひの奴徒者とおぼせすも有るけり
 せむしくそよしに況してはるる母の誤りし現在
 の母の悪意を訴人も同前そよあまこととあつらさぬ
 よハの心算もせむは前の且ねえの心病氣見ゆるべ
 かねて我しそよ身と火の中へ飛入るべしとあつらさぬ
 せむしくそよしに況してはるる母の誤りし現在

さねと神や仏のおもやら蓮の金と貫ひりの且那
 さえを樂くとすこまきしりげればとあつらさぬ
 心先祖さぬのちげれどやと且夕ちげれどあつらさぬ
 又どよのみ夏とやゆらと前まを其まよとあつらさぬ
 下さりしそよと漫し悲しうまて決がこむ成ませぬ
 ト袖を頼よち一當てしこまきしりげれどあつらさぬ
 先と流のんとあつらさぬ何のとえとあつらさぬ
 の夏とあつらさぬハ秘しとあつらさぬとあつらさぬ





春宵三日月阿專卷之三

美談 雅名 本朝好速傳

江戸

南仙笑楚満人稿木

第四回

此家の主公大和屋文藏病氣あびのぢりつと月代
 延びてくる青さるも身の中夜着と打まるとい傳流と
 と居らうとらう。お勝源次が争ひの耳の入りとや目を
 覚し打まるといつ障子を明け 大藏 誰うと
 といふの思つら久しゆのゆと源公千話喧嘩も

憚らうららからまじやう臺屋へりつて。何ぞあつひは人物を
 取て来てくさうらうら。そのうちからア畑とつけて居るら。
 七ては務やも仙もくへ来て吞がりひ。おまが又ちうと
 りくはさるまもあつ。何とやらえ物あつらうら。
 河の勇の源次 源 一うふあまえとんうふおむらうら
 夏へとどりやせえんえのころちも言がらうと。とんうら
 ころもの。実こころかそと野じもね入のサ。とんうら
 親方よりちうら臺屋へ往てとんうらまのやせうら

とんから頼むを。何でも早の物がひらう子達ぐるえの氣
 ころころの。又店の外へようてくころの。ちうらうら往て
 来てくさうら 源 「アイト 源二いそのうらま臺屋へけりうら人の
 香の物ころころらち臺屋へりうら文徳文舞の類どか又畑とつけ守(有念の
 えとあつらうら店の外へりうら文徳(店むらひ 文「サアく お仙か 勝ら
 ちうらうらちうら入まねく。アアのころは今日の寒まは吞ねく
 とがは當る。サアくへ爰へてまが河お仙も務もの。アアと
 そのまあつらうら酒度もひら浮ぬ物ひ 文「コレお仙か勝
 も源公まはけはよ居るうらやう。あまうらうもは入影か



つこまが有あり。とまづららははままももびびののたたててししゆゆら
 ととままくくははつつ番番ととううここととままづづとと喧喧花花口口論論たたううりり毎毎日日
 高高賣賣ののよよううななままああでで居居ここううちちふふららとと妻妻のの内内へへ入入まますす
 這這入入てて後後ととままづづららああんんたたののよよままここととままづづららとと嫁嫁ととア
 かか永永ののここづづららひひゆゆらら店店のの見見たたかか久久落落ととすすららゆゆらら。んん
 木木ややままととりりよよ二二面面ががここららくくううららちち又又おおままがが病病氣氣がが上上
 たたももはは舞舞ふふららどどふふままああららううとと思思ふふ一一野野よよおお仙仙ががアア毎毎
 理理よよ店店へへおおててここままづづらら昔昔のの増増ししてて錢錢がが毎毎日日益益

入入るる有有難難いいがが今今もものの通通りりもも仙仙くくとと世世捨捨よよすすらら
 勿勿体体ううののここらら思思ふふどどふふもも世世間間ががここららののくくららよよびびずずとと
 ああららすするるものもののの陰陰ででおおぐぐんんででたたららううりり居居るる。ササララととんんなな
 面面白白くくもも秘秘入入喇喇ハハよよととふふ一一ッッ吞吞んんでで精精ををてて店店へへおおてて
 おお客客とと取取ららががゆゆひひ源源ををももわわららすすおお務務とと喧喧花花口口よよすす
 ががゆゆひひ源源一一イヤイヤモモウウ金金にに夏夏ううららおお務務ももここららててもも前前のの
 おお世世話話よよううららいい。おお仙仙ささんんももううららくく其其ののままままままととおおひひ
 ううままららととううらら見見ててすすままいい。元元ののまままままま深深実実ななららううららおお

た夏とごころら。夏らしてころくハはやせん。多くも務らふ。一それは
 且え那の山の海切ハこと一初めお仙さんも仇をらそ
 ぬら思ひませぬ。一今もか初めでごらりますん
 日しんも乳母の世活よううこましてその縁でまるる
 ぬらへまのりましてはいふふはニぬらうのま午りと
 ぬら宿世のあんでごらりますやう後よごらりはます
 とまよちん捨のふお世活らましていふのませすアアア
 とまくいん捨のりん捨わのと他人がまの何のとま

おまが方といん捨てゆらひていふの。モウくこのよらま夏ハ
 一そよ早く店へおろがらく。誓入一日のいふまこうてある
 うちの商賣と大切よ一夜トやアららね入。ドレおますも
 飯のあまふちぬ入達ハ飯のどうでいらうくお暮での物
ト 膳でいふていふ山お務らしめなすもいふそのちらに
ト 縁次もあらうていふといく愛をいふかのけら

第五回

青あ柳の横こへまりて三三日月お山か姪ごの風俗と
 見ふ来る人は買よらう人の山う子居るなままはお舞舞の

強欲男の限
八十八



火之用鎮



きんぐ。とてし。の客入が。か。つ。の。あ。つ。や。る。か。今。ハ
表へ。お。い。ま。す。ま。ら。い。が。よ。ろ。ろ。ト。お。い。ま。す。

う。ろ。く。を。強。げ。ば。い。ま。い。の。年。増。の。お。務。め。と。い。れ

お。仙。さん。何。あ。も。そ。ん。の。あ。ま。さ。さ。と。ま。る。の。と。ん。ま。ま。は

切。店。あ。い。くら。も。有。ま。早。く。裏。の。用。公。口。を。明。け。て。送

し。や。が。の。ひ。さ。く。お。別。さん。と。ら。ら。早。い。お。送。り。げ。さ。れ

ま。せ。ト。案。内。あ。つ。る。度。ま。ら。が。お。務。め。先。お。裏。の。用。公。口。の。人。を

あ。い。ま。の。同。じ。兼。倉。ろ。う。米。町。の。商。人。は。及。須。原。の。ま。ま。と。と。ま。を

あ。い。ま。の。重。荷。と。い。ふ。もの。の。ろ。う。ま。ま。は。お。務。め。が。谷。の。わ。ら。の。

何。が。の。館。か。の。取。つ。た。金。三。百。兩。と。ま。る。と。て。か。り。が。け。寒。さ。を

き。と。し。ら。ひ。の。の。ま。の。ま。は。お。務。め。の。一。が。あ。つ。ら。う。宣。傳。さ。し。は。三

百。兩。と。お。仙。さん。の。ま。ま。の。一。が。か。ん。と。ま。ま。の。三。三。十。兩。と。あ。い。ま。の。南。海

と。ま。ま。と。ま。ま。と。て。か。り。と。か。ん。と。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

と。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

店。の。日。又。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

と。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

お。い。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。

ちやうどと新入して...
 は同じくか愛へ来し時...
 ちやうど何ぞ拾う...
 ちやうど...
 の落し...
 物...
 うか...

金...
 三日...
 海川...
 親方...
 親方...
 親方...
 親方...
 親方...

馬店へ往て。一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。

ても出る。明日ハ昇かてお出る。か。毎日。待て
 ち。一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。



火之用少
心之用心

志らまて長且つり。始終を變て重載ハら且一決よか
 のしりた車一ア有り難うござりませぬ。お仙どの人の噂よ三寸
 月おせんとの女ハ晋紳のおと種ごの貴人高俊のお姫
 さぬよのこ愛まじどえのそんま人の瓜子が賤一の局
 店の女郎と志でららう。お方おの今をせよのとから。
 恐ろしい今の中うつく一ト通うの夏で行ぬゆゑ。
 そんま噂とせせて客と呼ぶの計りめで有らう。お仙どの
 容候とのし志操とのしひ發へ貴人高俊もあつね見織

せあてとれハド一が心だうり。社とのしびらうのしどすも山妻の
 たりぬらと志で下さのせ下三百兩のその内は十兩は
 てお仙どのしお仙ハお仙ハお仙ハお仙ハお仙ハお仙ハお仙ハお仙ハ
 けからぬ喜と志しきあらうませ。切店の女郎ハ昼夜志の
 呼ぶらうと志して。金五兩の十兩のと太夫の金を
 お仙どのしお仙どのしお仙どのしお仙どのしお仙どのしお仙どのし
 志らまてお仙どのしお仙どのしお仙どのしお仙どのしお仙どのし
 の金ハお仙どのしお仙どのしお仙どのしお仙どのしお仙どのし

そのおちろやせう

たうで其十兩がむらゝのくらゐらら三百兩も返してよる

あませぬ。サテく人目よからぬその内よ早ふも病へも入ら

うららしませけ金のあよ二日三日も。お病へ入らぬとあつて

からハ病ううーお病でもお病のてしつていひのちもあつて危

邦よ入らね私邦ふおらねと替時が回も此苦勞るまれ

まゝしよ。はあううの悪事場入あまのつこまれのあ必すぐ

はなも大切の物やうい。あ持つていひつ時ハ此酒もあつて

まてはううのあ入らちららぬよよ。此の附けま下。

おと忠信うるお仙が河車番増く感下の車イヤ末の

おまも思ひてのりて下さるお仙どの河有つと難いごう林

その河よ取入て。モウ何あもやませぬはごうと家へかへ

主人ももやまらませよ。そんころ又け回よゆらつとを

およからしませうト。おまもらへ車番のどがどくよらつと。このお

おまもらけ。や車番があまら。おまもら。車。旦那さぬお内さる私

かけ二三日おまもら。往てたせもの金とまらて返りませぬ

ハ。さう何ら思ひまゝころうか。みぢんま。左振る奴で

をさるけりまてととあまいぬ。何なんうこころの深ふかのよふを
有あまごころうと落おち分わけををらひて居ゐる。あふよよ遠とほく
金かねを持もつてあつて重おもきも重おもき何なんうも重おもきを眼まなこかへさる
ゆゑころうころうぬるまもぬるまぬる深ふかの深ふかのぬるまぬる
りころのぬるまを断たぎつて安やす平ひらかたのト山やま嶽たけとすいり安やす後ご
すてく
敷しき列りよくよちよびける。

春ある濟き三日みか月つき阿あ尊そん卷まき之の三さん冊まき

